

Oshima  
Letter

# 大島レター

# 9

March  
2021



## 表紙のお話

表紙は、令和元年の初夏、大島で開催された梅の収穫・加工ワークショップでの写真です。北の山の梅林など数カ所で、たくさん梅を収穫させてもらいました。梅は洗って、丁寧に水分をふきとり、砂糖につけて、梅シロップにします。砂糖が溶けるまでしばらく待ったのち、炭酸水で割った冷たく、さわやかな飲み物にして、とても好評だったようです。梅のほかにも、やまもも、秋のかりん、冬の甘夏、春のよもぎなど、季節ごとの大島のめぐみを収穫し、加工することは、大きな楽しみでした。しかし今、大島へ行くことができないぶん、いつも、大島のことを想っています。冬、梅の花の咲く、風の強い大島。春、青い梅の実のつく、霞の大島。初夏、梅の実が熟れる、梅雨の大島。ふたたび、大島へ行ける日が、待ち遠しいです。

(写真・文：白神基広)





## 目次

〈最近の活動報告〉

高校生たちの夏

「瀬戸内アートサマープログラム2020」

3

〈インタビュー〉

大島の今を聞きました

7

こえび隊が〇〇さんに聞きました

9

〈連載コーナー〉

瀬戸内放送局 今月の「大島アワー」

10

編集後記



高校生たちの夏

# 瀬戸内アートサマー プログラム2020

香川県教育委員会教育長 工代祐司

## プログラム行程

### 1日目 8月8日(土):オリエンテーション

**午前** 開講式・講義(瀬戸内国際芸術祭と瀬戸内の魅力発見について)

**午後** グループワーク(フィールドワーク先の島ごとに分かれて座学、行動計画作成)

直島は観光、豊島は食、女木島は祭り、男木島は建築、大島は歴史と、島ごとにテーマを決め、詳しく掘り下げていきます。

### 2日目 8月9日(日):フィールドワーク

こえび隊の案内でいぎ島へ! 各島2グループに分かれ、1日目に学んだことやグループごとに立てた仮説を、現場に行き、自分たちの目で確認します。

### 3日目 8月29日(土):プレゼンテーション

プログラム最終日。グループごとに島について学んだこと、考えたことを発表します。

県教育委員会では、平成30年(2018年)から、「高校生のための瀬戸内アートサマープログラム」(略称SASP)を始めました。これは県内の高校生に参加を募り、瀬戸内国際芸術祭の舞台となっている島々でフィールドワークを行い、自分たちの郷土の魅力や課題、将来に

ついて考えていくプログラムです。3回目となった今年度(令和2年度)は、コロナ禍の中、なんとか8月に開催することができました。今回の特徴としては、大島、女木島、男木島、豊島、直島の五つの島のうち、どの島を研究したいかを応募の段階で選んでもらう方法をとりました



た。各島10名の計50名の定員に対して約2倍の申し込みがあり、最終的に抽選で参加者を決めさせていいただきました。

大島グループは三つの高校から1、2年生10人の参加となり、8月8日のオリエンテーション時に初顔合わせを行い、二つの班に分かれました。翌日は、当初、大島でのフィールドワークを行う予定でしたが、残念ながら島に渡ることは見合わせました。その後、約3週間、生徒の皆さんは大島に関する文献を調べたり、記録映像を観たり、こえび隊の方から大島での活動や大島青松園の方々の暮らしぶりを聞いたり、精力的に勉強を進めました。そして、8月29日、サンポートのeとびあ・かがわで、研究成果の発表会に臨みました。

大島グループ第1班のテーマは

第1班



第2班



「コロナとハンセン病」。ハンセン病から学んだことを生かしているのかという問いを立て、今まさに世界で深刻化している新型コロナウィルス感染症とハンセン病とを対比し、隔離の問題、それによる犠牲の問題、共通点と相違点、同じ悲劇を繰り返さないために自分たちはどうしなければならぬか、正しい理解と対処の必要性を訴えました。

第2班は、「芸術祭がもたらした大島と人のつながり」というテーマ。入所者の野村さんがおっしゃっていた「大島は人間を捨てた島」という重い言葉が象徴する「大島の記憶」を決して忘れてはいけない。だからこそ、梅が実り、アートの点在する美しい大島の魅力をさらに一層発信することが大事だ。それによって、多くの人に大島を知ってもらい、そのつながりを通じた島の活性

化を目指していきましようと呼びかけました。どちらも素晴らしい発表でした。

「自分の故郷について知らないことばかりだった。島の課題についてもっと考えを深め、少しでも力になれるようになりたい。」「今後は、大島

のいろいろな行事にも参加したい。」  
「残念ながら大島でのフィールドワークはできなかった。学んだことを忘れず必ず大島の地に足を踏み入れます。」という高校生たちの言葉がとてもうれしかったです。

今回、大島をはじめ島々の歴史、文化、暮らしを学び、そこにある課題を発見し、その解決方法を自分なりに考えた高校生の皆さん。短い期間ではありましたが、この経験は今



男木島でのフィールドワークの様子

後の皆さんの人生の中で遭遇する様々な課題や困難への対応にきつと役立つものになったと思います。

最後に、お世話になった島の皆さん、企画、運営、講評まで御尽力いただいた瀬戸芸総合、ディレクターの北川フラムさん、香川大学創造工学部の長谷川修一先生、高校生の学びを的確に支援いただいたこえび隊、瀬戸芸事務局をはじめ御協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

第1班  
発表



第2班  
発表



それぞれ選んだ島は一つですが、お互いに研究成果を発表し合うことで、その他の島についても学びました。

他の島に行った  
高校生たちの声

●島々には「瀬戸内国際芸術祭だけじゃない!」「様々な魅力がある。」と感じました。大島の梅や豊島の島キッチン、棚田など:ハンセン病感染者の隔離や、産業廃棄物の不法投棄など悲しいこともあることが分かりました。

●ハンセン病の歴史から、現代のコロナウイルスで「同じ過ちを繰り返してはならない」ということを学びました。

## インタビュー

# 今の大島を聞きました

国立療養所大島青松園

入所者自治会

会長 森 和男さん

副会長 野村 宏さん



聞き手：甘利彩子、笹川尚子(こえび隊)



**こえび** 2019年は瀬戸内国際芸術祭の開催年でした。2019年と2020年とは、状況が変わってしまいましたね。

**森さん** 大きく変わってしまったね。日常の生活もガラリと変わってしまったよ。委託診療で島外へ出る場合を除いて、ほとんど外へ行ってはいないよね。

**野村さん** 今は、本当に静かよ。小島だけがピーピー鳴いとるね。ただがピーピー鳴いとるね。

**こえび** 入所者のみなさんの生活はどう変化しましたか？

**野村さん** 月1回、希望の入所者と職員と一緒に高松のスーパーへ行く、「買い物支援」というのがあるんだよ。こう

した買い物支援は職員が代行して、入所者が行くのは全部中止になったね。私たちも平均年齢85歳で高齢だからね。それから、入所者は外から来るお客さんと同じ船を利用するから、施設見学も断らなければいけなくなってしまった。

**森さん** 他の園では、施設見学を再開しているところもあるけど、大島は離島だから今も遠慮してもらっているね。私は、高松の百貨店まで買い物へ出かけることがあるけど、他のところへはできるだけ寄らないようにしているよ。あと、会議もほとんどリモートになったね。

**こえび** どんなりリモート会議をしているのですか？

**森さん** 昨日は、全国13か所の療養所とつないで会議を行っていたんだよ。厚生労働省との会議もリモートでしているね。私はSkypeよりもZoomの方が慣れていているね(笑)。移動をしなくなった分、リモートでの会議で楽になったよ。

**こえび** 野村さんは、先日アーティストの田島征三さんともオンラインでお話していましたね。

**野村さん** 田島さんの作品「森の小径」のところだね。田島さんに森の小径の様子を伝えてあげたよ。田島さんも寂しそうにしとったよ。

**こえび** アーティストのみなさんも大島に1年以上行けていませんが、毎月放送の「大島アワー」でアーティストのメッセージをお届けしていますね。

**野村さん** 「大島アワー」はね、けっこうみんな楽しみながら聞いているよ。**森さん** ちょうど15時の定時放送のあ



とに放送されるでしょ。夕食が始まる前だから、みんな部屋に帰って聞いているんだろうね。

**こえび** 毎年、恒例のクリスマス会やもちつき会で、みなさんのお顔を拝見できていたのですが、去年は会えなかったです。

**野村さん** クリスマス会はね、園内だけで開催したんよ。大島会館にみんな集まって、看護師さんや各センターの出し物だけにしてね。

**こえび** 夏祭りも中止になりましたが、花火を打ち上げていましたね。

**野村さん** あんたら、見えたやろう。

**こえび** 私は高松港から見えました！（笹川）。私は、豊島にいて音だけ聞きました！（甘利）。

**野村さん** 男木島も花火があがったんやないか？ 大島もね、例年通りに花火をあげたよ。大島の花火は、亡くなった方の鎮魂の意味を込めて花火を打ち上げているんよ。今年は、お盆の13日に住職さんを迎えて昼間は盆供養

を行ってね。花火の話聞いた住職さんが、花火をあげるときにお経を読んでもくれたんよ。夏祭りは中止になったけれど、例年通り600発ぐらいの花火があがったね。

**森さん** 他の何か所かの療養所でも、夏の花火をあげているところがあるね。花火があがると沈んでいた気分も明るくなるしね。

**こえび** 他にはどんな変化がありましたか？

**野村さん** 病棟で「なごみカフェ」を週2回、大島会館の会議室で「喫茶」が週1回ある。みんながコーヒーを飲んだり、レクリエーションをしたりする機会を職員が以前からつくってくれて、いろいろと企画してくれているね。そんな時も、職員は一切マスクを外さないようにしているよ。

**森さん** 看護師や介護士は毎日緊張しているだろうね。船の中でも一切喋らずに、気をつけてくれているね。

**こえび** 感染症予防は大切なことです

が、なんだか寂しいですよ。

**森さん** 人と意思疎通がしにくい状態になると、いろいろなと支障が出てくるよ。普段通り、人と会話をしていたらね、違うんだろうけど。

**こえび** コロナが早く収まるといいですね。

**森さん** 来年、瀬戸内国際芸術祭よね。その準備もやらないかんのよ。

**野村さん** 早3年が経つかい？

**こえび** そうなんです、早いですよね。

**森さん** 来年、コロナがもうちょっと収まっていたら良いんだけどね。大島だけじゃなくて、芸術祭は、離島が多いから。みんな船に乗って移動するからね。

**こえび** 今年1年はどんな年になって欲しいですか？

**森さん** 希望としては、早くコロナが収束に向かってくれたら良いね。なんとか、少しずつ収めてくれたらと思っています。

Q1

酒井さんが所属している団体のことを教えてください。

「ハンセン病問題基本法」の制定が緊急課題として提起され、それを実現させるため「ハンセン病問題基本法制定をすすめる会」が2007年に結成されました。その後、2008年6月に「ハンセン病問題基本法」が成立、2009年4月施行されました。この間の運動などを報告書にまとめた後に解散予定でしたが、せっかくできた組織を今後もハンセン病問題の解決に協力する組織として残せないかという意見があり、「ハンセン病問題を考える市民の会」と名前を変えて団体を残しました。現在は、約80名で構成され、みんなボランティアです。県内に住む方がほとんどです。教科書でハンセン病という言葉を見たことがない世代も多く、市民の会に参加しながら学んでいる印象があります。



ハンセン病問題を考える市民の会 事務局長  
酒井光雄さん

Q2

2020年はコロナ禍で大島へ行けない日々が続きましたが、酒井さんたちはどんな活動をしていましたか？

毎年、春休みと夏休みに開催していた「大島臨海学校」や6月の「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」に開催予定だった講演と映画の上映会も密になるので、2020年は中止になってしまいました。唯一開催できたのは、高松の本土側で行なった講演会と映画の上映会でした。コロナ対策を十分にした上で、11月29日に開催。ハンセン病問題に関心のある人たち38名が参加してくれました。そのほとんどが、大島に足を運んだことのある人たちでした。この1年間、大島へ行けていない方が多くいるので、会場に来てくれたことはとても嬉しかったです。



参加者とハンセン病問題を考え、ハンセン病への理解をより深めてもらうために開催された(2020.11.29)

Q3

今後の活動や大島への想いを教えてください。

大島のみなさんがご高齢になっているので、今のうちに入所者さんの生の声をいろいろな人たちに聞いて欲しいと思っています。まずは、子どもたちが大島へ行って入所者さんからお話を聞く。そして、その子どもたちが親御さんに話してもらうのが一番良いと考えています。「臨海学校」はそこを目指し、開催を続けています。子どもたちが大島に行くこと入所者のみなさんも喜んでくれます。コロナが落ち着いて、青松園から入島の許可が得られたら、コロナ対策を行なった上で活動を再開していきたいですね。

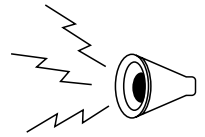


善通寺東西中学校ボランティアクラブの生徒も参加し、他の参加者と花壇に花を植える活動を行なっている

〈連載コーナー〉

## 瀬戸内放送局

### 今月の「大島アワー」



毎年12月になると、大島でもちつき会を開催しています。2020年は、残念ながら中止になったので、豊島にあるレストラン島キッチンでおもちを作り、職員さんを通じて入所者さんにお届けしました。いつものもちつき会では、入所者さんから昔のもちつきエピソードを聞くのが楽しみの一つ。これまで聞いたもちつきエピソードを紹介します。

私たちがよく聞くエピソードは、まだ機械が導入される前のお話。国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史の「閉ざされた島の昭和史」によると、大島青松園で年末のもちつきが始まったのは、1931年12月28日。夕方5時に開始し、翌29日の午前6時半までもちをつき続け、正午に配布が完了したそうです。使用したもち米の量は、約1トン。その後も、もちつき用の機械を導入しながら、50年続いていました。入所者の高齢化やおもちを作っていた加工部<sup>※</sup>が整備計画により取り壊しとなり、年末恒例のもちつきは途絶えてしまいました。

#### 「夜明け前から準備をして1日かけて1トンのもちをつくじょった」

5つの石臼を並べて、1トンものおもちをついたそう。みんなで和気あいあいとおもちを作っている様子が想像できます。このエピソードを聞くたびに1トンというもち米の量が毎回驚きます。できあがったおもちは戸板に並べられていました。おもちを並べる場所も工夫が見られます。

#### 「せいろを何段にも積んでもち米を蒸しよった」

何段もせいろを積んで、蒸し上がったら息を合わせて一番下のものをひきぬぎ、白へと運んでいました。入所者の野村さんは、当時運ぶ係を任されたことがあるそうです。

#### 「入所者一人ひとりに一升もちが配られよった」

みんながお正月の間食べられるようにと寮員みんなに一升もちが配られていました。もちを切る人によって大きさが違うため、個数はいろいろでしたが、だいたい35個ずつ配られていました。

一旦途絶えたおもちつきは、1993年頃から、青松園の職員さんによって再開しました。最初の頃は石臼と杵を使って、元気な入所者さんがついたり、丸めたりしていましたが、手伝える入所者さんも少なくなり、機械で作るようになりました。その職員さんが2009年に退職すると、もちつきも終わってしまうことに……その頃大島のアイデアアへとつながっていったのです。そして、2010年の12月、昔ながらの石臼と杵を使ってべったん、べったんとつく、もちつきが復活！入所者さん、職員さん、庵治第二小学校の小学生や保育園の子どもたちもやってきて、賑やかなもちつき会となりました。今はこえび隊がバトンを継ぎ、入所者さんたちの懐かしい思い出が蘇る大切な歳時記の一つとなっています。

※加工部 1933年に始まり、入所者がお菓子の製造販売をしていました。もち、ようかん、まんじゅう、ろっぽうやき等の加工を行っていました。



上：サツマイモを入れると、柔らかく、つるんとした仕上がりになり、のど越しがよくなる。やさしい美術プロジェクトのメンバーが職員さんから教えてもらった作り方  
下：2017年からは大島会館の入り口でおもちをつくようになった。入所者のみなさんも周りで「よいしょー、よいしょー」と掛け声を入れてくれる

## 編集後記

昨年2月の作品公開を最後に、大島

での活動は今も自粛となっています。

入所者のみなさんにお会いできなかつ

たり、職員さんとは電話やメールのみ

のやり取りに変化しました。今回、自

治会の森さん、野村さんのオンライン

インタビュで、大島の生活も変化

したと伺いました。特に、全国ハンセ

ン病療養所入所者協議会会長の森さ

んはオンライン会議が増えたようで、

「オンラインはどうですか？」と尋ね

ると、「ミュートを外すのを忘れてし

まうことがあるんだよ」とおっしゃっ

ていました。「ミュート」という言葉

を聞いた瞬間、使い慣れていらっしゃ

る！と感じました。

世界の状況は一変しましたが、私た

ちの大島へ行きたい、入所者のみなさ

んにお会いしたいという気持ちは変

わりません。このような状況はまだ

しばらく続きそうです。今できるこ

とを積み重ねていきたいと思えます。